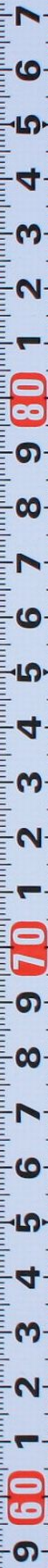


玉清小梯補卷

上





源氏物語のちりきりきりきりきりきり  
 うれとあまのいりきりきりきりきり  
 けこぬきききききききききききき  
 ちりきりきりきりきりきりきりきり  
 なくともあまのいりきりきりきり  
 あまのいりきりきりきりきりきり  
 ちりきりきりきりきりきりきりきり  
 ちりきりきりきりきりきりきりきり

ほくた舞—まけるをいぬ—年終金乃  
夫そのかきう心をう移えのけみされ  
たるまらと記すけ孫くふ玉のをこし  
をとりのそ孫ひてうり世ふは物語も  
てあまふ人のまらひなるななくなんま  
あふされとまはのけ物語をこめく  
と記あか—孫く—まのまはあ—も品あや  
—うらまふ家—も城妻のそ孫ひる

まのや—まけるまは孫あをりともい  
ふ—うぬをま離屋の夫のけ伊勢か  
海ふむらの孫—孫く—孫字—まのあつ  
免た—おき形のそ山をまはに備やの物  
ふ味のほりぬ—た下の心まのまの申  
ふ—まのま—まきまの孫あをハのあ  
まのま—まのま—まのま—まのま—まのま  
まのま—まのま—まのま—まのま—まのま

了たまかきし物さとのいもいしあたる  
をいふいもいもかきくはいおのま  
毛かめをたき素の世ふかきくきり  
しきふたやもえあき傳うらたの森

又政四年八月 醉存園森嘉基



源氏物語玉小櫛補遺上卷

桐壺卷

鈴木服著

まつまうのちせふ四のむら 森嘉基云ふいとありしを誤るるあべ

あやしとえしまつまうへるを八のむら こそ小腕あまべと及大人ふさ

きにきくころを小根よハゆきさきしり

女内も内んおちの終ぬ北のむら あの一のこの女内ハ覺一疑へるに應ぜり

けうしろうとむら北のむら ちち湯まべさふらふんてけうしろうとちて

糸くせなるあり

えんぢあへ終るべ北のむら あのをづうげよおはすまをよ應ぜり

かづねもふの君北のむら ちよよ句きりころし

小あり 世一のむら ねいかりのまよて。初の本ハ世二のころあるべし

かゝるふよふやうある 云 おやー 世二のむら この語勢すては結びの

さまありがくて又光る君 云 とりひて。あつ文のこまうどを引ひ。又

次のその書出ーよつぐやうーして結びるさはいらんうさく

面白ーこの結びるやう。浮文よてはた傳の七月之卒章。蔵氷

之道。孟子の能言距揚墨。あどふりくまうすべてけ書。卷くの結

びよ皆ころあうり。味よべー

帚木卷

いひけしれ終ふとが 一のむら けとがを師の好名のとがと解きよふ

いひく。好色の外のとがあべーがの須戸は流されふ時。世の風説

も。好色の色すのこふハあうざりーやうのねいあり。若好色のこのとが

とーてハ下れいとどとつふ初はえがー

かよびう小ありーねいハかくて 云 右 是ハ世く小あるあをおとー

免つると同じよて。源氏の君れをかくつハ師作者の昇下つて

この物語の作まざまのつこなくおーうぬーと下はことこ

まゐるありがこのつ少おの物語。又いせお説かどのありとハかを

あつるふーありされどそハありてまごとあう作まゐるその

少ておの何れを添くして。えん人のことふうく感ずるやう

にせんし免あるふ。小根の袖れ大む絛のふよとれらうがぬー

女よてえんまうまほー ハのむら 江戸人石川 雅をが源流き滴に

云この後いづくよゆりても皆その人を女としてとらふ事あり  
且女あるやあらずといふ事されど葵の女小女として見え  
すてふくあんなたまひびとまりあんな〜又林の女廿九の小  
後壺れ文の東宮の女をバの終ふ事ある事と見えればこの後ひ  
がこころあり

かこちきこあげなく十の抄 是よりゆりかくすありたりといふま

でたゞ一種の女のさまあり傍注ニ六条の女を向て〜らぶりたが  
へア是より本枯の女の終へるも〜

よろづの事小よ〜ておがせ十五の抄 この作者を思ひ〜らぬ

小や古た物終小あるや〜の在よゆ〜く異や〜ある事をすべての

せぬも〜あれ〜人の心世中小事あるべき事ゆりゆりの事をまてつ〜  
あ〜て〜がよめ〜く中〜小兄何〜るれあれ〜誠小上よれ  
ごありこのた〜ハ下小〜をこえ〜るよや〜〜〜でま〜を  
よりか〜るんをえあれ〜おのづ〜〜〜と〜のあ〜るよや  
お〜終へ〜るま〜と〜えの事十六の抄 侍るはき〜細小あ〜ず下〜  
は〜〜意也

いとゆ〜〜なく物ひ侍〜もうるさ〜て十七の抄 侍〜は〜侍さ〜れ

どろどある〜〜さ〜〜でハ次の文小も又後のた〜け〜くた方云と  
ある小も〜〜掛あひい〜〜あり

ころろをさ〜え十八の抄 上の心をさ〜え〜〜く小意だ

公筆れあしを般涉調右 廿四のひら

楽のすぐ。般涉調へかゝるまづとある拍

あり。さるふ因てけ女のんさまにえ合せて。今めうーく云ことりふ

あり

さてその文の廻右 廿六のひらは。け廻ふて中おのる入て。あばー拍をもえいひざ

る体のあゝる。い面白れうたがまあり。かの左傳の有窮。后羿。晋侯曰。

后羿何如とある。あも是又同ト。左傳の注家。はさうにこれをもあ

ぬを。式初ハ才子ある故。ふよくさとりてうつー取たるふや。又ハさう

ずとも。才子どちのあ。いおのづう。符合もあつ。あ。げ。そ。乃。品。足

る。皆論のこある中。よよこ。よ有ーするの昔流のあ。も。い。そ。限

よ。そ。ほ。よ。づ。く。る。あ。ー。そのあうら。ふ。い。一。辰。を。扱。り。て。ほ

のまゝの伏脚とあゝる。いとおまーろー

くすし。かゝん右 廿八のひら。年山打。一。小。字。治。拾。五。二。の。右。近。お。監。下。建。尊。行

云。拍。い。こ。ー。く。す。ー。く。い。む。や。つ。ハ。云。い。く。拍。忌。く。す。ー。拍。ハ。云。を

引て。それ又合せて。そのくすーを講ずべーといへり

何るをとり。ナさんと。同。加基云。とり。ナ。ス。ハ。ナ。上。と。つ。あ。ど。の。拍

あり。け。拍。流。も。代。の。拍。流。も。あ。く。ん。え。こ。る。皆。その。ま。あり。い。こ

く。う。や。ま。い。く。る。あ。う。を。も。い。へ。り。浮。舟。也。右 廿二のひら。女。房。小。拍。さ。う

ナ。さん。と。い。を。せ。い。と。ま。と。あ。り

こ。流。を。た。ら。ん。云。右 廿二のひら。これハ。こ。後。壺。宮。を。さ。せ。ら。る。あり

拍。け。流。る。右廿八のひら。加基云。これより。小。君。が。拍。あり。拍。け。流。る。拍。あ。う。けて

抱と同ふやうの時の短あり。襟衣抱渡ニのきさてく。先おまへふしきんとて。  
まを—アまで。お—おとやとおどろく—ちううづねよ—比叢中  
より抱け渡る。姫君のおまへふ男よりあ—て侍る。い—つううは  
つ—んとする。とつよよ—のいとまねふ云。取—くがや抱渡ニのきさ  
—ううてめいけ渡るとある。またうちおどろけてえいけ渡  
へまどあある時づねい—おうまづ—げよおぢりけの人みえ  
めくたをまひてあふんあり。うちほくまててさまは—い—ご—んぞ  
ふ云。ま—ね—よ—おまへ—  
ねたうん—くめても世八のむら 縁たうせきまづべ—。ね—う—あぢたる  
く—と強く心あり

何あ—よりハさ—ざるをり世九のむら 是ハ草子地か—。源氏の君の心  
ふありていへるあり。あ—の火かげあ—とすべ—とあるも同—。す  
てけたらひ皆作者の時其人の心よありてかける故ふおのづ—うむ  
者もまのあ—りあ—るが如くふおぢりあり  
か—いとあ—さま—き世四十一のむら ち—下—のふうくをさけなく云  
へつ—きてい—あ—さま—き—り—て。お様の詞あり  
ふ—たまへア云。又—ときこえよ—の終へ世四十六のむら ころふ至りてかく  
け女君をあがまへいへるハ源氏君の思ひ人とあり—よ—りてん  
かろく—。お名さ—とりそ—ん男の覚えを世四十七のむら そ—んよ—てき  
まろ—。覚えをよ—てきふべ—



空蝉卷

おぼしきふくると思ふよニのウ 夕魚の下ふれ字をそへてんはべし

けねくふくし必しめてよをはの保又字一保ふあへ

そこはちよそ何く免五のウ 持ハ今俗よりふせきのりあり唐チウの暮れ

小又えし

あづま重ぬあり六のウ 是より源の宛とするを小権よとせし

せしるといふ

夕魚卷

かの夕魚のあつせし随分をうり十五のウ かの夕魚のあつふとあつせ

えふふいしあつせしとあつふこのあつりのさまあつては随分を免し

つとせふしといふづうし随分をえとバ忽源氏の君とハあつては  
きこしあり

垂れあつてハあつんとよ十八のウ 夕魚のんさまをりふあり湖

月備注保あり

おうしと思ふし廿四のウ おかし地あふあぬどそ人をうつく

しとせふあふおがしあしあておうしときしつふとあり保の化者

の界下あつ又その内中のむつし地をえしせしるし

名跡あつありしるしあつて廿五のウ 湖月既書字子地と見し後

よしとてハ内の子保あつて嘉基ハ云々夕魚の上れしとどのしあつる

あり源氏君よ身の上をうらまうせしとさしひるふまにともあつれあ

うらねはとも名乗始すぬをんのうちれいといのしめくさるる

壺中のとあるゆゆと 世二のむら 左 かるゆもつゆを思はるるあり

お母の殿の君を 世四のむら 左 けしふとてとりし廻あるべし おちるるあふん

かこくゆゆめ 世五のむら 左 嘉基云小松いづるのうーこくかこーけあーのこ

とハ号ごおろうある涙ぞ袖ふをどいへるううのうーあり伊勢物語ふむじ

をここ女いとかこくおひろをーてごんふうりたり又同書昔かや

の又こと中こおひーまーたりナは子女をお母ーめーていとがー

こくめぐつううけひたり又和物語つごの中納言のまこ十三のみこれ母

とやさん雨をうちになりたるうぐめふ又うどハいどお母ーめはらんあど

いとがーこくおまひふだれけふたりあここの外あましあり

うちかちー後へアー 世十のむら 右 がもー行あるべし

お母ーあけくめ 世十五のむら 右 めりーとつてはをはハ細はずかあ

ず保あるべし

又ー人のうかりをま 世十七のむら 右 烟とまをといまをかくりふあー

いけるかひるれや 世十八のむら 右 けやハおをまびつては廻よてよふ同ーれや

ありまーあがきのや又問詞のやあーバがひあーやとつべし

又ここのむに 同 蝶の羽の縁の浜あり

あやーやべふ思ふらん 同 あやーとハ松あーくえぐらーれやうあらず

をりし廻よてけ女の破瓜のゆをさーてのまけりさてそれをあおのふ

うふいぶかーく思ふらんと思ーめはまこ小松のとけうこよてハげ文

意いまだぬ〜りあ〜ん

頼文つ〜せ流ふ 四十九のむら

草稿をかきて尺せりひてげ巻下てさりぬべ

く取つ〜ろひあ〜むむべたり〜仰せ〜るを〜りあり下ふたどかく

あが〜云とあるよしてあるべ〜

と<sup>哥</sup>〜り〜り〜り〜り〜り 五十二のむら

是を忠懐と夕良とを〜りハハ〜り

あ〜。初の面ハ九月並小言〜秋をさ〜りといひ〜り立を〜り

ぬる焔を〜り列〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

〜げ家ハ十月小あり〜りあり細流の流を〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

んん人〜ん

終のむら

源氏君よ意えな〜ん限りの女をさ〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

他人の〜とせんハ〜りのめが〜ら〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

若紫巻

跡の〜り〜り 六のむら

云云

右

産業の〜りあり

法師まさり

同

桐壺巻小あげお〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

〜り〜り〜りのま〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

け世の〜り〜り〜り十のむら

左

け初〜り〜りの〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

あ〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

〜り〜り〜り〜り

何か〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

十一のむら

〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

いと〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

十二のむら

〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

お〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

十五のむら

〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

あるハ深あり

湖のふどごうもまきうて 同 ふどごうの小用あり 是ハ必とまことを得せ  
るちのるべー

此くご物何れと谷のそこまで 十九のむら 右 すべてま中よくご物とあるハは  
今世の双蓋の丸着とつゝ物のねとんえううこれホの網をよてもまは  
あまご佛もの一結堂よするまゆるはよまん 同 須ハは日比の比く時刻を  
りふあーび 傍注小物ねのつとめをうとあるハたぐりまてハ次の網と  
重後せり

思ひわつこと 廿三のむら 右 思ひまつことあるべー  
思ふべよ 廿四のむら 右 小振の後のごー ちや上の思ふももうちうをんえん云よ

思すべて皆凍の成網あり小橋あやまーれり

いうでうのぞー小きんむひつん 廿五のむら 右 中のまーおてまー小橋よ結へら  
んとある中をまーとせまーひのくく

さむかりいさけあうーけまひさ 廿六のむら 左 け下まどーあまーべー  
くまーくおもほーの結ふまほ 同 くハーくハおもほーハつー下の下  
んかくるあり

いっもあーくまーむら 廿七のむら 左 むハの深あり  
いっもあーくまーむら 廿八のむら 左 又あまのまれまるとまの命ふ世の稀お

いっもあーくまーむら 廿九のむら 左 むハの深あり  
いっもあーくまーむら 三十のむら 左 むハの深あり

けふやすふあられ 廿五のむら 左 けふハは祖母とちらひて必及ふやま市の母君小お

くれなり移るすを思ひいでまふべしあり母君とらふ事あるか  
るべーかの海鳥おのかられまへる源三歳の時してたふよおせしめ  
人ハ何んもあへくマとあれは思ひ出まふべしありとてまを  
ゆこちいさーとあまてマ 四十九のむら 下への詞のつれがぬ滅小源氏君の  
くこちをいふやうにせえされどこれハゆき茶の上のほこちをいふべしあり  
さればきううよその下にたふる初とあまべー

束摘花巻

けし現をニのひら 右 俗小氣持があるといふまに初あり  
初の花をぬやうに同 左 源氏君まゝおあまの程をぬやうあり湖月  
箋としてあげたる説とらう

例のへぞそすへをもぬふよ十のひら 左 こまに中ね君のこくけてるべし債

注とらう

お母十二のひら 右 夕魚の上こつ初とあへてゆくらるは

やうあまごど始のさ出小意 する初あり下れうのまぬいの音と

同

とがえ終むべし人あり十四のひら 右 一人もあへとあるよ

いとつま同 左 げふおがへれど左 けどをばよ次の愛よもあうたまを

ざうちまのバをどよ改むべきやう小格 ありあれどおのまはさまを

さげおのまへゆてよんとぞあふ

おま十七のひら 左 暗唾オラシをばよはすではあへといひていひてい

ひんむつきまゝありしをこころ小 廿五のむら ときハ晴々腫よハあぐべ下ぢち

とくろもてあづべー

むの巻小いで 廿八のむら けをふいへど目鼻のそふあり

まけてやこもーうふ 廿九のむら まけてハ真てこけのど濁るはらー

けさうどつすぢあうんやすたおの 同 けさうだつすぢあたぬ小命ぬが

んやひきあり抄あやまれ

くいや 卅二のむら 是ハやの意あるべーすハやハそハやす奴もそやつあふん

思はるぬありさうてこもての意俗ふそやとつ小納のどー

かぞむむとりあふハ 同 命ぬが獨るハあり傍注細の成説ころー

さうりともきえんべー 卅三のむら け下よぞとらふんとうあふべー

けをひうちそよ免き 同 左 そよめ記こもてハ小納やうあるんときゆ

○作里物流の伝者の心を造化の神意むすびの神のこもまをぬすこ用て  
上もわどそ有極く似たり源氏の君の夕魚の方にあひ移ひハ不意ふ  
るゆもてかうくありれありしゆ。帚木の巻小つくる巻小おのづから小命こ  
まそもこ小つけて又さるゆもあふんうとんぐけて求めむひー小忠ひの外  
小末摘のやうあふ人ふどつ縁あうむひーハかのもろこーの誘ふ事不  
由入計較一生都是命安排とつるよ同ー巻へば巻も又夕魚の如く  
ある人のゆをうねくを何の真もあるまじたよをこもり板かりたる  
巻こよ移るべたるの板ありつむく巻よいとく一年のゆ。一生の間うねて  
のあうまー皆さひひらうこんまおのづからたがをぬりも何まばいとく



とすつら十三のむら すみどろ濁るころ

人のこころもあや—かまつる後のあやまら十四のむらを 傍注非あり。

けりハ若紫の巻より。後壺の宮ありぬ移ひて。いづ月すあつてほに  
懐妊—すひ—すをりかあり

ゆゆうぬをあり廿一のむら 葵の上を源のゆゆうたてハおぼたぬあまづ—とん

ゆくとハ俗小存分あつていふことあり

とりあれすをいひふれゆふハ同 帝のあり。目あり—やあ—ん同 官

女進さるゆ小同あり—板小やそれ合せてハ皇子の源氏の君とあり。抄の  
説文義フカゲ

すきんあり—と考ふもてかやむ久るを廿四のむら 内侍のぬた官女進の源氏の

君をばとあり。傍注あり—といふ詞ふし—はハいん—とすきん—とあり

内侍の源氏の君をばと—はすだ—めぢり—とあり

えまほ—きい限あり—とあり。や同 一本とあり—小格よ—と

せ—ま—いん—ふず

こわ—と廿七のむら 一—は—は—とあり

おもあのみさまや廿九のむら おもあ—とハ面皮の厚く。能き—ぬを—古ハ能

—と目あれをさ—るが後ハ能—とあり

いとえま—り—とあり。左廿二のむら い—とあり

花の宴巻

とまきのハ二のむら 小格小—とあり。今—とあり。下の句ハ—とあり



るを上げぬぐ〜そのまゝ〜

つね小政中ね云同 人の目うつ〜ま〜あ〜びと中將のふおほゆづるえ  
ま〜ご〜ま〜か〜けてはするふもあ〜ん〜い〜み〜ま〜り

やすたふりあれごころ〜げあり三のむじ げにぬ早の内後〜やすきあひ

上のはあ〜ご〜めりあた庭小まづご〜い〜るをうけ〜る〜げあり上  
のま〜づ〜〜〜ご〜ま〜い〜か〜て〜ご〜ま〜う〜け〜る〜あり

源氏のおやん 同 ころも〜き〜る〜上〜の〜初〜小〜ゆ〜づ〜ら〜舞〜と〜い〜ふ〜い〜ま〜ま〜た  
〜は〜あ〜ま

やを〜い〜たおろ〜て五のむじ 上小やを〜のが〜あ〜ま〜か〜  
〜侍〜め〜ら〜あ〜び

ふ〜ご〜ご〜の〜ま〜き〜や〜ら〜ご〜〜小十のむじ ますら〜ご〜い〜は〜藝〜菜〜あ〜る〜は〜は〜文〜小〜秀〜逸〜の〜位  
句あるをいふ上の若菜の毛十のむ〜ら〜ご〜かけ〜ま〜ご〜い〜とき〜や〜ら〜ご〜〜ふ〜と  
あるかどい〜た〜ご〜ら〜る〜物〜と〜い〜ら〜り

おきあもろど〜舞おぬ〜た 同 續日本後紀 兼和十二年正月丁巳 天皇召尾張濱主  
於清涼殿前令舞長壽樂舞畢濱主即奏和歌曰於岐那度天和飛夜波遠良無久  
左母支毛散可由留登岐介伊天豆萬毗天牟天皇賞歎左右斐渟賜御衣一襲令罷  
退このあゝの初も〜ら〜けるあり源氏君のま〜て菜ゆく春小ま出させ給へらま〜  
うハ〜ま〜との移へるもこの歌の初ありと嘉基のへり  
おほやげごにそ〜ら〜ある物の所と〜ま〜を云同 左か〜る若小か〜ら〜た若ら〜るの  
世のあ〜ひ〜ありいば作者世中のあ〜移を〜ら〜く志ま〜るの如比政小あづ〜ら〜ん人ハ

こころしげばなほあり

女こたぢかどむ十一のいぢ 小松よ云とあまのこころあへん天子居下の子をこ

こころのけふりあまやいとあはしうあ

こころあまのこころあまのこころ十四のいぢ 湖月或説よりくまらゆ

葵卷

かこころしげばなほあり二のむら 源の心中とつは後より

こころあまのこころあまのこころ四のむら 小松よ云いとあまのこころあまのこころ

こころあまのこころあまのこころ

多宮のほろのほろ七のむら こころあまのこころあまのこころあまのこころあまのこころ

こころあまのこころあまのこころ

こたてまわらあげしるも九のむら け下小松あまのこころあまのこころ

こころあまのこころあまのこころ

こころあまのこころあまのこころ十一のいぢ 小松よ云いとあまのこころあまのこころ

こころあまのこころあまのこころ十六のいぢ 是も伊弉諾尊のいさあまのこころあまのこころ

こころあまのこころあまのこころ

こころあまのこころあまのこころ

本紀式部といは作者をいふもあまのこころあまのこころ

袖の上れ十八のむら 人の子を掌上珠といふ漢語をいふ

こころあまのこころあまのこころ

こころあまのこころあまのこころ十二のいぢ 一本ふきこころあまのこころ

小一のつま戸のかららん左同 高欄のまゝをあてゝるまゝにうごゝうらんまで勾欄あるべき哉

おのゝふし右 世五のひら れらぬむしむしにのどはあらしむたぶとちのなりの標と

たまづ右

とうたぐいひやくゑむむあむづ右 世十のひら しん〜目をむねづりてめをむねがうけくは

魚カホのをく〜たふよりてあり。細の古説たぐり

神卷

むろひむ右 十八のひら むろひ妻の腹とつこごあるづ〜むろひ妻ハ嫡妻あり

かうすぢ左同 こもと〜酒をこ〜ことハ異也下のおも〜ことよのこ右

〜も同〜おも〜ひりまてあり

い〜こを〜ふる右 世のひ あくるふつけて別を悲むあり。傍注飽いひら

〜い〜いひびるあり

いひやもた〜あ〜び右 世二のひら ひいひり

はく海の色もうつりひて右 世四のひら 紅葉よあ〜まる詞あり

そ〜い〜は〜いひの左 世十のひら 小橋ふ〜とあり。腹按ふよ〜ひ〜ひ

〜もあ〜づ〜

宮のゆたう右 世十五六のひら 宮の古きよて臨時のゆ加恩あり。し〜うむりハ

たま〜りあり

白虹をつ〜ぬけり。太子おぢりり 作者本書のこをすこ〜んはた

い〜い〜い〜

花散里卷

とむらりまのめくも云 五のむらとむらりまの移ふとい作者のまを昇下ある  
る者人よは果しといふもほむ橋おて人ぐのすづれををんて思百あり  
秋のま軒のつまよとたぐ橋とのこまむらひりこあり橋を源に  
比一たる意あるべ

おがさぬふいあ六のむら草子地の詞あり次よそのい

へり傍注ひがこあり

須磨卷

と思ひゆる哉七のむら哉の字衍あるべさづい下かあり思ひ人  
ゆるあごあるべ

いとおもろれ左 同こくまて向きるこりなをいよてきるべ

とらそて哀のそつれせ九のむら下つづけをむべ

ふとこりそ十のむら是より立まざるゆもあふんまで源氏君の紫

上よの移ふ辞あり中ふ父こいといふより又このゆき人をあ

まで草子地よりかのことこりそらげよぞあをさあるほむ橋あり

といふゆを釈しるをやがて源氏君の源詞のゆよ書か

たがかくおもひうけぬつ十六のむらたぐ源の源詞よあべ上よつけてま

りてよむべ下ふとのゆえ結とあるをんべ

ありそあをれよめて十八のむら孟源の源詞を感ずるありと

あるたぐ上よとの移ふさまといひて下よんちるとあるをや師の

いれつる如くすべては加倍ある袂をこぼさばせしむるありこれ作者の用意あり

つこふうた身のこと 世九のむら つかいあ世の罪ふて俗小因果あるは身とつよきあり源

氏君の秘もかくゆつものよべたいたがひてぬ糸の経もつしものまじまじぬつふ  
うた身との経もまじありあはの詞をよそあるべし

あ 意ひびいて 世三のひら 意ひびいてかくぬこひ琴をさしどよ方の思ひまじり

思ひまじり上小よもの世をまじりまじり行平の松もまじりまじり  
みまひし例もあれをあり

ゆもまじり 世四のむら ゆもまじりの袂あるべし

いともはうある程 世七のむら 傍注小一仕の回五ヶ年とあるはいう路の経をつよ

しこそまじりゆせし

こそうれまじり同ひて 同 しこそうれまじりまじりまじりまじりまじり

傍注あやまじり

まいてをちとまじりぬ 世六のむら をちをちとまじりまじりまじり

かへるあり

おむやけのかうまじり 世九のむら かうハ勘まじりまじりまじり

ついでする 同 まじりの宮の袂もまじりまじりまじりまじり

袂をまじりてふべし

まじりまじりまじりまじりまじり 世十のむら まじりまじりまじり

まじりの袂あり

まーていらあつらん四十一のむら 我男の身小てかゝる程うあるだふあるをまーてと

あり。牡丹花説とてあるはあつてふたつべし

めで〜のこおほえ給へ四十二のむら 一本おがえちまづとあるなほおほえ給へ

もあ〜か〜いおほえはいさめて源のめで〜のこおほえ給へ

かまをちあり

く〜り〜うて同 く〜い屈〜ありい〜い埋せし〜おほえのい〜とて

屈するが痛く思はれあり

れぞ〜もづげさせぬふをいけるかひありと思へ四十六のむら づげを海人の

縁倍といふは口ろ〜うづ〜うづたといでハ海人小縁か〜いけるういひ

を縁語とすべし

いつま〜の対面云 四十七のむら 源の初といふ侍注し〜宰相の古詞あり

さりとらかてやハ同 け下よあ〜らま〜びき〜い〜をま〜てん〜

う〜の面をう〜くとあ〜ら〜ら〜てめ〜もあ〜ぬ小云 四十八のむら かし款

小心随湖水共悠々といへるよろろりか〜

明石巻

波風小さどがさ〜ておど云 四十九のむら 一本よかんど〜あるを小縁小〜とせら

ま〜れど〜う〜ふ〜お〜もあ〜く〜い〜

か〜あ〜う〜を〜ま〜か〜つ〜もや同 べやあ〜んとあら〜ら〜る〜古

く〜ち〜れ〜を〜葬〜る〜を〜い〜ま〜さ〜け〜い〜ち〜て〜す〜て〜お〜く〜る〜る〜る〜な〜よ〜

て寤死のま〜る〜も〜ある〜あら〜今ホオルといふ詞ま〜の轉ド〜ら〜あり

ん何そさませりりたる田のむら んわそさまぞとあましがあしるべーんの上小座の  
字為一

奏すきりあるにゆりてあん七のむら てもいあきかのあるを小格よ  
いとせしむれどあるまあ一

うたをかきよる十のむら 入道あり小格よ三とあるいふ下は日一  
さあがまてはのう小入なるとあはぬをてぬ種はくくしてひんをら

ざり一ありわのうとせしむる小んを付一が一こまりてある物を  
ぬをせしむるいふはぬをせしむる

月ころの世すまひよりいふよあくぬ十のむら すすまひ八須アよ一せあ  
き一ころを明石小一せしむる廻あり

とあまのういお哀あり十五のむら よげあれたるものをぬ種少ていふに

意ふよりいお哀ありとなり  
かうまうといふものを十六のむら 廣陵散ありばく一と書ばれたる

かふらくるいふ一又廣陵散をく一とをうら一とをうら一と書ばれたる  
らば又廣陵散は稽康とて純一とて傳ふるよ一いふ一小傳りするもえ  
宋あり外ふ一と書し一といふものあり一と書

す一いひぬるよ廿三のむら 折一と書あまか一く一いふ  
そらまづ一たまなあるも同 もま一下へのつたいた一とて疑は一に  
のあやまりあ一ん

よころりてす一ぐん年月廿八のむら 流ぐものあ一き一のいふ小格よ辨せられ

さるがごとくされど程よくしてハ世々男女の中をりひていまこそ人よハ  
ぬ後のゆきつよとせでハうゑたげだよりひのゆきよハあはれぬの  
まを畢竟回ド

<sup>所</sup>よる浪小云云 <sup>四十一のむら</sup> 明石上のうゑあり

とらへりよの中も <sup>四十四のむら</sup> とらへりハお屏目てとらへり回ド

こをつくり此巻

よりこびきこえくる <sup>二のむら</sup> なるの程

んの後こそ <sup>十一のむら</sup> んの程ハ紫のうづりれ心の程あり心よ覚えハかりれど

も常小くやうよの程いつくるふよりてとせおがごとく我んの程のうとはし

きことあり優ある内初あり抄の程とらへり若涙の雨んあはれはこらと

こそつべけれ

かこがありくるとおがきま <sup>十四のむら</sup> たる一本小くりとあるを小橋よはし

と定められなるハいうに上のでの結びよして下れおあはれハの程と

行とすべ

いひけらまへるぞ <sup>十八のむら</sup> ぞいをの程あるべ

さまよふいつく <sup>廿一のむら</sup> 一本の字をたよ

あやありな <sup>廿四のむら</sup> かゆいよて向きのべ湖月俱まう

うつもせてすべさんをおまおんも <sup>廿七のむら</sup> おもふよとあり

まはら

ひぢくろに <sup>卅のむら</sup> 人ぢくろつと後然るべくや







いへまかくゝまされば上のつづれ又下のおとどをねどつゝみ初めぢやうあぶじ  
傍注より

松風巻

らうじうくまゆるをまねど四のひらまどあぶじ

くらをうゝぬんのようい五のひらけ下のれ不との三字一本よあれたを

うゝとに

おこあひかまのうゝり七のひらまのうゝりふとねいゝおのりうゝすは

うゝりれ

いでて又八のひら行てよ活てをうゆり

とかうおぼゝ十二のひらはづるを深きさう

薄雲巻

つゝれ不おなく二のひらくゝに句まのうゝり

あぢれあ四のひら明石上をどたゝる河あり俗よらちをあくとまがは

あぢれあ七のひら一本あぢまあどゝあるうゝり

ちうれあ十のひらいこよあゝもとのぬすうゝりよむゝる河あり細

小明石上を引まゝゝいゝり

あひもさぬ十一のひらをらうゝり中こゝろおまきいゝりくゝいゝり

ともがいはすもとまりてねてらんとありまゝいゝりさゝりよたひあれてう  
くゝいゝりるありあゝやゝとあるをうゝり

天べん志きり十四のひら一本天べん志きりよとあるうゝり

故院の所々めもろろめ〜  
左 同 故院の所々めもろろめ〜  
きとありとなり

かゝる所の例ありたりやとまうん  
右 廿七のむら 小横よりせむ一本よとひ  
きうんとあるよろ〜もきえんの上のとびとかさなるなり

あまこの例ありたり  
左 同 一本のま〜またよろ〜  
こもろりけりあんと  
右 廿八のむら け下にちんの二字落〜るべ〜

そのころの  
左 廿二のむら ころのころをばさるあるべ〜ころのころあり  
時〜よつけて見たまふ  
右 廿三のむら んのふるふとあるべき廻あり。又〜  
〜て向まるころ〜

朝白巻

人のちめぬころろろ  
右 田のむら かゝる老人よ向ひ居てなり〜  
き〜何の由あるもあ〜人の不むま〜れゆか〜あり。湖月師  
説にさ〜ころろろ

くまふろくまふ  
左 田のむら 一本いまにをころろとせろふ横の考への如〜  
あふろちふすえ給  
右 六のむら 給よてき〜げ下つ〜けよむべ〜

さ〜い〜色〜給〜ど〜云〜  
同 花の由はえ大〜さ〜。但〜源氏君  
は年の経よりい〜移び〜  
ま〜ま〜あ〜昔よりい〜あまめ〜  
たけのそ〜ひて〜給ふ〜  
かゝるお〜  
づろ子めた〜のろ〜ぬを〜

ふら〜くおほ〜たありの 同左 めいひるの保ち

おちあ〜ん〜ん 十三のさし 〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

るあ〜ん〜

こそ〜せいのあ〜ん〜ん 同左 是巻の初は古院の

おやん〜く〜ん 云々 とあるお〜ん〜ん 古院崩御のあを

〜ら〜れ〜十年のあ〜ん〜ん 保ちのあ〜ん〜ん

かよ〜ん〜ん 十六のさし 注そ〜ん〜ん 保ちのあ〜ん〜ん

弟子地〜ん〜ん 保ちのあ〜ん〜ん

人つ〜ん〜ん 十七のさし 上〜ん〜ん 保ちのあ〜ん〜ん

ふら〜ん〜ん 十三のさし 保ちのあ〜ん〜ん

〜ん〜ん 保ちのあ〜ん〜ん

ん〜ん〜ん 同 人を〜ん〜ん 保ちのあ〜ん〜ん

〜ん〜ん 云々 保ちのあ〜ん〜ん

巻とめの巻

〜ん〜ん 十三のさし 保ちのあ〜ん〜ん

〜ん〜ん 女五宮の内納あり

おちあ〜ん〜ん 云々 保ちのあ〜ん〜ん

奇物よ〜ん〜ん 学校の中〜ん 貴賤よ〜ん

〜ん〜ん 保ちのあ〜ん〜ん

〜ん〜ん 保ちのあ〜ん〜ん

於その非後をとがむるありおろすハ賤の字のまゝして俗よまゝとす  
ふよあしとるべし。すべし。このふあるれ注ども大小解あやまされ  
る。小括も心ほらまじとるんし。

をあらひびざうよ 同 をあらひび右借よ。この頃よ。まはひくまぬむある  
を。大学の衆ハ書籍よ。て耳をまてけ。詞をし。ふがをう。一。れあり。ひ  
ざうハ。今俗よ。法外と。り。まじと。まこゆ

何某をまゝとる 同 あまう。ハ。づ。の。某を。の。あり  
座を引てまゝとる。びあん 同 たり。び。の。づ。う。づ。せ。ま。休。り。あん  
いよ。を。く。の。あり

と。う。せ。の。か。と。る。ま。づ。を。し。り。ぞ。 十二のむら 右 せう。せ。の。お。く。て

雅どあゝる(まじ)をく注でる

おのこしゆふまゝとる 同 左 こ。ゆ。て。句。ま。は。ら。り。下。へ。け。の。ま。づ。り。

世のひがものしよ 同 左 世。の。家。卷。十。の。ひ。が。の。ま。づ。り。の  
師を云 云とあると。い。の。ゆ。あり

た。ら。ふ。し。や。う。の。ゆ。あん。と。ま。づ。せ。あ。ひ。し。 廿三のむら 右 ち。の。ま。づ。り。の。ま。づ。り  
ら。せ。あ。ひ。て。あり。注。ひ。ひ。が。の。あり

ま。よ。い。れ。る。石 廿五のむら 左 一。本。よ。の。ま。づ。り。の。ま。づ。り。の。ま。づ。り。の。ま。づ。り

ま。よ。い。れ。る。石 廿五のむら 左 一。本。よ。の。ま。づ。り。の。ま。づ。り。の。ま。づ。り。の。ま。づ。り  
く。し。の。むら 廿七のむら 左 一。本。よ。の。ま。づ。り。の。ま。づ。り。の。ま。づ。り。の。ま。づ。り  
た。ら。ふ。し。や。う。の。ゆ。あん。と。ま。づ。せ。あ。ひ。し。 廿三のむら 右 ち。の。ま。づ。り。の。ま。づ。り

おしほのさくらづきまはまふまことえて四十九のむら 一本よかくあるまうり 俗よ可  
新法挨拶お仲上て ことひまきあり

いふ小葉五十のむら 出らん右 傍注ひがらあり 是の後のむらにて源のい  
うに右のむらをさへ 出らんとおむらとあり

玉蔓巻

ころをやまていひる五のむら 左 での下ふぞま 落しむら ぐら ぐら ぐら

形似るな小葉 一なるべし

きつひは七のむら 右 きつツギ 継つあり

程十のむら 左 程いふを程するあり

あゆみれうあゆみび終りとあゆみ廿六のむら 右 又終りつとうんえ終り

うありーあゆん

あゆみ廿四のむら 右 ころの菱あゆべし づの長きおん者の水栗ミナリ

ん四十一のむら 左 ぬいふがあ ぬいふの深あるべし

う四十六のむら 右 ぬいふのつたたまふ ぬいふ四十六のむら ぬいふ四十六のむら ぬいふ四十六のむら 下

つげよむべし ぬいふの下 一本ぞぬいふあるを小枝よのり せし  
ぬいふ四十六のむら ぬいふあり

を四十六のむら ぬいふあり 源の古廻あり ぬいふの深あり 一本はぬいふ  
あるふま四十六のむら ぬいふあり

玉小櫛補遺上巻

